

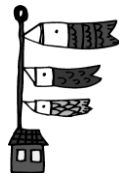
報しゅうめい

第6号

平成24年5月10日
発行 塾長 上谷 恭範
〒111-0052
台東区柳橋1-26-3
TEL 03(3862)9218
<http://www.syumei.co.jp>

ゴールデンウィーク特集 「何故私たちは勉強しなければならないのか」

新年度を迎えひと月、学校生活も落ち着いてきた頃と思います。そこで修明塾の教師は、「何故勉強をしなければならないのか」をテーマに自己紹介も兼ねて皆さんにお伝えします。連休を機に、もう一度勉強の意味について考えてみませんか？



塾長 上谷 恭範

幼な子に「どうして私は勉強しなければならないの」と問われた時、何と返答するか。それは「どうして動物は勉強しなくていいの」というのと同じ質問である。動物は本能のまま生き、行動し、文化文明を生み出してこなかったし、形も寿命も大した進化なく、環境次第で衰退していったものもいる。

では人が、動物と同じ環境で育った場合はどうなるか。人間らしく生きられるか、動物と同じ生き方をするのか、皆さんはこれから述べる事例をどう考えられるか。関東大震災の起こる（一九二三年）三年前、キリスト教伝道師シング氏がインドのジャングルでオオカミと暮らしている2人の少女を発見、自分の孤児院に保護した。

発見当時の年齢は不明だが、シング牧師は年少の子が約1歳6カ月、年長の子が8歳と推定している。11月24日。年長の子を「カマラ」、年少の子を「アマラ」と名付ける。カマラは「桃色のハス」、アマラは「明るい黄色い花」という意味である。アマラとカマラは共にオオカミのような振る舞いをした。ひざや腰の関節はかたく、立ちあがりたり歩いたりすることはできず、四つ足で移動した。食事は生肉と牛乳を好み、食べるときは手を使わず地面に置かれた皿に顔を近づけてなめるようにして口に入れた。聴覚、嗅覚は鋭く、70m離れたところで捨てられた鳥の内臓を察知し、その方向に四つ足で走っていった。目は暗闇でぎらぎらと光り、暗くても目が利くが、そのかわり日中は物がよく見えていないようだった。また、熱さや寒さにもほとんど反応しなかった。真夜中に遠吠えのような声をたてる以外は音声を発しなかった。

シング牧師は、彼女らを人間社会に融和させようと試みた。シング牧師の夫人はマッサージ師であり、からし油を使って2人の固くなった関節などをマッサージしてあげた。また、アマラはのどが渴いているときには「ブーブー」というような声を出すようになった。

1921年9月に入り、2人は病気が重くなり、数日間は昏睡状態となった。医者に見てもらい、9月12日には寄生虫を除去。15cm前後の虫がアマラのからだから18匹、カマラのからだから116匹排出された。カマラは病気を乗り切ったが、アマラは9月21日に腎臓炎で死去した。

アマラの死を理解するとカマラは両目から涙を流し、アマラの亡骸のもとを離れようとしなかった。アマラが死去した9月21日から9月27日までひとりですと部屋の隅でうずくまっていた。10月になってもカマラは意気消沈したままで、白痴のようになってしまった。その後、シング夫人がつきつきり世話とマッサージをし、11月の半ばを過ぎるとカマラは以前の元気を取り戻した。

その後、カマラは直立二足歩行のための訓練を受け始める。1923年6月10日に初めて2本足で立つことに成功し、少しずつではあるが言葉をしやべるようになっていった。1926年までに30ほどの単語を覚え、1927年に入ると短い簡単な文を口にするようになった。

1928年頃からカマラの体調は悪くなり、1929年9月26日に発病、11月14日の朝4時頃、尿毒症によって死亡した。（出典：フリー百科事典・ウィキペディアより）現在、この「カマラとアマラの物語」の真实性について疑問視している学者もいる。が、しかし、人間は、育った環境によって動物的生き方にもなるし、人間らしい生き方にもなる。私たちの脳も肉体の一部である。脳は鍛えること、刺激することにより、大きく成長する。したがって人は生まれた時から教育が始まる。「ことば」が一番いい例である。大脳皮質は150億と200億の細胞があり、これを刺激することにより、複雑な脳に完成する。しかも10才位までには完成するといわれている。

だから幼児から小学低学年までに脳を鍛えておく必要があるといわれるのである。確かに、脳を含む肉体の先天的能力はあるが、しかしなぜ学ぶのかと問われるなら、教育によって、脳も肉体も成長する後天的なものだからである。つまり、カマラとアマラのような動物的人間にならないために勉強する必要があるのだ。

ではもし、4・5才の子どもが、方程式が分かる、微分積分が解けるから、と、喜ぶべきことなのか。私は、そのような子どもを「ロボット化された人間」と称している。然し、人は「おぎや」と生まれた時から教育は始まっている。幼児期には、母親が教師であり「マンマ」「イナイイナイバー」「シーシー」と赤ちゃん言葉を教えている。年少から年長期には、「ノンちゃん雲にのる」「うらしまたろう」「いつすんぼうし」などお伽草子、昔ばなしなど寓話の世界を読み聞かせ、まいる、しかく、一つ二つ…と具象化したもので遊びながら学んでいる。小学低学年（小学1年生から4年生）になると、夢のある物語にときめきを覚え、たし算・ひき算・かけ算・わり算・小数の意味が分かるようになる。小学高学年になると、伝記物語や小説を読み、実話から抽象的な言葉を学び、分数・円周率・割合・速さの概念等、具体的なものから抽象化された概念が導入されてくる。中学生になると、人生とは、文学と科学など、己と他との批判精神が芽生え、正と負の概念・方程式・関数・相似図形の証明等々一般化、抽象化された概念が登場する。高校時代になると、正義とは、法と道徳について、罪と罰について、ニュートンの原理、アインシュタインの相対性原理、微分積分等々、抽象の世界に入っていく。

以上、急ぎ足で述べてきたが、脳の成長は動植物の成長と同じように正しい教育方法、手順を得て、芽が出、葉が育ち、花開くものであって、幼児期に抽象化された記号等を教えてはならない。そして高校生・大学生になって、赤ちゃん言葉を使用したり、童話しか読めないようでは、また、掛け算九九、小数・分数の計算が出来ないようでは、脳の育成において正しい教育が行われてきたとは思えない。さらに単なるよみ、かき、そろばんができれば社会生活が出来るからそれで良いということでもない。人間は誰しも「豊かな人生」をおくりたいと思っている。それには成長に応じた正しい学習内容の勉強が必要なのだということをお話しておく。

金子 義一

人の嗜好は、さまざまである。どんなに好きなこと、例えば音楽やスポーツ等が必ず将来の職業として従事できるわけではない。ある日、塾生のひとりに「なぜ勉強をしなければならないのか。」と問うたとき、その生徒は即座に「業だと思いません。」さらに「勉強、職業、生活すべてが一貫して社会に適用していくための定石です。」と力強く言い切った。まさに彼の発言が『勉強すること、すなわち学生の身分だと思った。』

現代社会は、あまりにも安直な世界になりつつある。携帯・メール・ブログ等、いろいろな情報を外出もせず、炬燵にあたりながらでも得ることはできる。しかし、その情報が価値のあるものか、正しいものかの判断もされずに目の前を通り過ぎていく。

学ぶことは知ること、知るためには、人間の持つ五感（視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚）を使い体験しなければならない。その体験には苦しいことも、楽しいこともあるだろう。それを経て視野を、さらに広げ正しい判断をするために今、鉛筆を持ち勉強することが大切である。

自己紹介

私は、東京オリンピック以前に静岡県沼津市で産声を上げ18歳まで、その地で青春を謳歌しました。その後、『少年よ大志を抱け』で名高い北海道大学に入学し勉学に勤しみました。卒業後、東京に移り住み現在に至っております。

数学・算数は学生時代から好きな科目でした。塾生の皆さんには、ぜひとも数学・算数を得意科目になってほしい。と願っております。

出井 寛太

それぞれの教科の学力を上げるためには、集中し、考え、正確に理解する能力が欠かせません。仕事や趣味（スポーツなども含めて）など、どんなことにもあてはまりませんが、もつと進歩するためには、勉強が必要です。これらの能力は、若いうちに身につければ、死ぬまであなたを助けられるでしょう。現在の勉強は、将来の進歩のための準備期間ではないでしょうか。

自己紹介

出井寛太と申します。おもに高砂教室で教えています。楽しく勉強しましょう。よろしくお願ひします。生徒のみなさんにお願ひしたいことは、「まちがえる事を怖がるな」ということです。まちがいは成長するためのチャンスです。決して悪い事じゃありません。おそれず問題にむかって下さい。勉強がんばって。応援しています。

脇田 良子

なぜ私達は勉強をしなければならないのでしょうか。それはひとりの人間になるためだと私は思います。「勉強」という字を目にすると、学校・成績というイメージが湧きますが、乳幼児が言葉を覚える・立つ・歩くといったこと、ごあいさつ等々の日常のマナー、公衆道徳を大人から躾けられることも「勉強」と言えるのではないのでしょうか。幼児期に学力の土台である躾を身に付けた子どもは、「聞く力・読む力・考える力・くり返し練習する力」が備わります。これらの力が備わった子どもが、学齢期に達すると、学ぶ楽しさを知り、学力の高い子どもになります。

勉強の最終目標は脳の体力をアップさせることです。体力のある脳を持った子どもたちは立派な人間へと成長し、学ぶこと（勉強）の大切さを次世代につないでくれると思います。

自己紹介

私は東京の下町深川に、二人姉弟の長女として誕生、両親は、自分たちが子どもの頃、勉強がしたくても出来ない時代に育ったため、私たち姉弟には、十分な教育を受けさせてくれました。私も自分の子どもたちに良い教育環境をと思い中学受験をさせました。その合格を手助けしてくれたのが、「修明塾」でした。

私は今、私と私の子どもたちが味わった、合格という喜びを1人でも多くの塾生やご家族に味わっていただくため、塾教師としております。

柴田 圭

教育者を悩ませる子供の疑問の一つに「なぜ勉強をしなければならないの？」という永遠のテーマがあります。私は経済上の理由から、「勉強をする」ことで、学費免除などの特典を得ながら苦学して卒業した経験があります。実は嫌々でも「勉強を続ける」と、ある日を境に「楽しい」と感じる時が、必ずやってきます。そして不思議なことに、少しずつ自分の視野が広まり心を豊かにさせてくれるような様々な出会いの機会に恵まれるのです。同時に、集中力や思考力も養成され、良循環が生まれ、人生において、自由に操れる「強運」を引き寄せられるのです。

勉強をするということは、「自信と自立」をサポートし、人生を豊かにしてくれるものだと考えています。私は修明塾での授業や生徒たちとのコミュニケーションを通して、「子供目線の疑問」に答えていきたいと思っています。

自己紹介

私は大学と大学院時代に塾講師や家庭教師を長らく務め、就職してもなお「教育業界一筋」に歩んで参りました。「地方での受験指導」の経験からの視点で考えると、東京での受験指導には、刺激のある「さまざまな要素」があることを教わりました。

浅草橋と高砂の両教室で「勉強の楽しさを共有する授業」をしながら、毎日、生徒や保護者の方々の窓口になっておりますので、いつでも（24時間対応!!）叱咤激励を含めて、「ご連絡・ご相談お待ちしております」。

上谷 修一郎

何故自分は学校に行つて勉強しなければならないのか。子供の時には誰しも考えたであろうこの問いに答えることは難しい。受験に合格するためだろうか。一流大学に合格して大企業に勤めるためだろうか。21世紀に入つて人々の生き方が多様化する中でこのような答えはあまり説得力がないし、又魅力的でもないと思う。そもそも勉強とは何だろうか。答えの決まった解法を頭に詰め込むことだろうか。初等中等教育において一定の詰込み教育は必要不可欠であるし、それによって誰もが知らなければならぬ最低限の基礎的知識が平等に提供されていることは重要なことである。

しかしながら、現実生活においてそして又社会に出てそのような知識を如何に用いるかということを考えるならば、教え込まれた知識を唯、受け止めるだけではなく、それを咀嚼し、自家薬籠中の物とした上で応用し、組み合わせながら活用、発展させていく姿勢を身に着けることの方が望ましいとも言える。この点において日本のとりわけ中高生への教育が、例え有名私立校であったとしてもアメリカのボーディングスクールなどと比べて劣っている点は否めない。

とはいえこのような考え方についても、勉強を学校教育、それも近代国民国家に特徴的な義務教育よりもより広義な学問的哲学的営為として捉え直すことで、敢えて疑問を投げかけてみたい。勉強によって得られる知識とは何らかの目的に対する、例えば快適な生活、便利な生活を人間が送るための手段として用いられるべきものなのだろうか。そもそも知識が人間に奉仕するための手段であるという考え方は近代特有のものである。知識の追求による徳の陶冶を目的とする古代ギリシアの観想的生活の理想からすれば手段としての知識はより低位のものでしかない。実生活に役に立たない知識、存在への問いかけこそが言わば本来追求されるべき学問的知識なのである。

従つて何故勉強する必要があるのかという最初の問いに戻るならばソクラテスであれば次のように答えるはずである。魂の秩序の自然的完成を目指した精神の生活、高貴な生活を送るためである。

自己紹介

現代文、論述式問題対策を担当致します上谷修一郎と申します。現代文では難解な論説文の論理を如何に容易に読み解くか、小説文の登場人物の心情の移り変わりを如何にその機微を踏まえて理解するかを考えて授業します。論述式対策のためには文章の書き方を一から指導し又添削致します。直前期には点数アップのためのテクニクについてもお話しします。受講生の現状の成績は問いませんが、試験問題を唯、解くだけで満足するのではなく、その問題の背景にある思想や哲学まで学ぼうとする意欲を持つことを希望します。

寺川 豊

「勉強しなければならない（must）か」と聞かれれば、それは「No」だ。しなくても生きてはいける。そもそも「わかる」ということはどうだろうか。それは語彙変換（分かる・解る・判る）から見て取れるように「わかる」とは全体を分解した部分に対する理解であり、自らの判断を通して、世界が何らかの意味を持って立ち現れる瞬間である。学問をする過程においてはしばしば、世界が全く新しい視点のもとに眺められるという、新鮮な驚き・発見を伴う瞬間に立ち会う。全ての偉人は例外なく、既存の視点に挑み・破り、常に未知なる可能性を想像し、既知の世界として定着させてきた。

学問は本来強制されてするものではない。学問の本質は常に問い続けること、人間の探究心にある―自分は何者であり、どんな世界を見たいのか。ただ問いこそが重要だ。そうすれば学びは自然についてくる。問いの内に世界はすでに志向されている―問いは即ち答えである。世界はあなたの問い（＝視点）によって規定されている。あなたの最も内なるものからの希求に従い、前に進みたいと願うその時、世界はあなたが今まで想像もしなかったような、すばらしい景色を見せてくれるかもしれない。

自己紹介

先の文章の通り、受験にしても日頃の勉強においても、お子さん本人に目的や意欲があることが最も大事な要素であるように思います。しかしそれは理想論であり、実際私自身も中学受験・大学受験と明確な意志があつたわけではありませんでした。学生時代に良い成績を維持できたのは一重に両親のおかげであると思つております。学問の持つ意味に自分なりに気付けたのは大学に入つてしばらくしてからで、その時、勉強の意味も分からない中で曲がりなりに勉強をしてきて良かったし、また今まで勉強できる環境を整え続けてくれた両親に一段と感謝するようになりました。

ゴールデンウィーク特別講座のお知らせ

日時：5/3・5/4

浅草橋教室 9:00~13:00

高砂教室 15:00~19:00



①小5・小6 中学受験生対象 「受験算数基礎定着講座」 受講料：1日あたり 3,150円（税込）	②公立中学生対象 「1学期中間テスト対策講座」 （数学・英語） 受講料：1日あたり 2,100円（税込）
---	--

お問い合わせ・お申し込みは各教室へ（事前予約制 5/1まで）

浅草橋教室：03-3862-9218

高砂教室：03-3650-7214

期間限定キャンペーン(先着10名様)

当講座を受講し、平成24年5月31日（木）までに、

ご入塾のお手続きをされる方は**入塾金半額**

みなさまのご参加をお待ちしております

